

《 安部 隆孝 様 講演本文 》

非常にあがっております。私、香港在住 40 年になります、安部隆孝と申します。この度は、このような荣誉ある賞を頂き、心より感謝申し上げます。

1974 年に初めて香港に着いたときには、正直「えらいところに来てしまった」と思いました。ですが、今、この壇上のほうがもっとえらいことです。

着任早々、金田中グループの“岡半”という鉄板焼きのお店に配属されました。英語も、広東語も分からず、香港の岡半のスタッフには「安部！」と呼び捨てにされ、もう、それでも持ち前の負けん気で頑張っただけでまいりました。半年もすると、ある程度の広東語をマスターできましたし、スタッフとのコミュニケーションも格段に良くなりました。

その当時は、日本食そのものが極めて高価な外食でした。当時の日本食店は 40 軒ぐらいしかなく、松阪牛のすき焼きが、これは金田中なんですけれども、キッチン見習いの 1 カ月分の給料に匹敵、それが相場でした。当然、お客さまは超一流の方々ばかりです。早くも世界進出を果たした大企業の方々、金融関係、そして、政府、自治体の関係の方々の利用が多かったような気がします。

当時は、すし、刺し身などを食べるのは日本人ばかりでした。中には、生を食べる香港の方もいらっしゃいましたが、トロの刺し身をブランデーに浸して食べました。多分、考えてみますと、消毒の意味かと思うのですけれども。

一番困ったことは、日本への食材の注文でした。当時は、ファックスなんてありません。日本への国際電話は、高くてもできませんでした。唯一の方法と言えば、速達郵便でしたが、届くまで 4、5 日はかかりますので、1 週間前にはポストに入れなければなりませんでした。発注に時間はかかりましたが、配達は今から迅速でした。築地で朝仕入れたものが、その日の夕方に香港に着いていましたから、今とあまり変わりはありません。

こうして、香港での日本食の鮮度が保てたのも、大っぴらには言えませんが、「日本航空様ありがとうございます」です。

私には、忘れられない二つの言葉があります。

私が起業したのは、1992 年です。サラリーマンから経営者への転身。不安もいっぱいありました。金田中を辞めるときに、金田中の社長に「こけたら、胸を張って帰って来い」と言われた一言が、涙が出るほどうれしかったことを覚えております。

しかし、これからと始めてはみたもののパートナーに逃げられました。多額の借金です。心の片隅では、「逃げたほうが楽だろうな」と、「もう、誘惑に負けてはいかん」と。そのときに、うちの妻が、そこでカメラ撮っていますけど、「もともと一文無しだったんだから、本当に駄目だったら札幌に帰るべ」という、その一言で、闘志が湧きました。

でも、捨てる神あれば拾う神ありで、別のパートナーが現れて無事に乗り越えることができ、2002 年からは、独自の会社を立ち上げて現在に至っております。

日本料理に欠かせないのは、“おもてなし”です。今すぐく話題になっております。私の

思うおもてなしは、大きな心で、もったいないを大事にし、手を加えた料理を和やかに召し上がっていただき、幸せになる。料理、器、サービス、季節感、旬といったものが一体となったときに、日本人の「心」が入れば、それがおもてなしになります。ただマニュアルに従っただけというような、“心の無い料理”、“心の無い味付け”、“心のあるサービス”、これはいけません。日本料理に代表される日本文化は、人と人の間に心の懸け橋を掛けることが大事なことだと思います。それと、おもてなしは、決め事ではありません。変化するものです。ある人にとっての最高のおもてなしが、他の人にとっては違うかもしれません。相手の気分や状況、時間、体調などを忖度して臨機応変に喜んでもらえることを先回りする、これが、大切だと私は信じております。

私自身も、お客さまとの会話を心がけながら、お客さまが何を望んでいるかを常に把握するようにしています。これが、私の選んだ道だと思っております。

私は、北海道生まれです。父は宮城県出身です。東北には、強い思いがありますが、震災時はとても他人事とは思えませんでした。先月岩手、去年宮城と仙台に被災地を目の当たりにして、復興はまだまだというのを痛感致しました。

現在、香港では5県の農産物が輸入禁止とされていますが、農産物についても早期に対策を完了して「安全・安心」を香港の方々に味わっていただくことが大切だと思っております。それを、いつやるか、今でしょう。

香港では、ここ数年来、日本食に対する味・技術が急速に向上しております。専門店も数多く出ております。今や、1,200店を超える日本食レストランに対して、本物の味・文化・おもてなしを伝えていければと思っております。

最後になりますが、私を育てていただいた料亭金田中と香港のお客さま方と、キッコーマンさんに感謝を込めて、私のごあいさつとさせていただきます。どうも、ありがとうございました。